韓日語り物文芸における物揃え

――『春香伝』と『浄瑠璃姫物語』の比較から――

邊　恩　田

一　物揃えと語り物

日本の語り物文芸において、「物揃え」「物尽くし」は、最も注目される表現様式の一つである。その名の示す如く、事物や人物などを列挙し揃えるもので、古く『古事記』に見られるだけでなく、『梁塵秘抄』『枕草子』や『新猿楽記』などに、さまざまな形態の物揃え文を見い出すことができ、日本文学の伝統に備わった表現方法であることが知られる。

しかし、物揃えの典型的な様式は、音曲を伴う語り物において見出せるのではないだろうか。今、その事例を二、三挙げてみると、まず『平家物語』には、巻三の公卿揃、巻四の源氏揃と大衆揃、そして巻五に朝敵揃という名寄せが見られる。そのうち源氏揃は、

まづ京都には、出羽前司光信が子共、伊賀守光基、出羽判官光長、出羽蔵人光重、出羽冠者光能、熊野には、故六条判官為義が末子十郎義盛とてかくれて候。摂津国には（後略）①

に続き、河内国から最後の陸奥国まで十二カ国に分けて、諸国雌伏の源氏五十余人を列挙する人名揃えとなっている。この長々しい列挙が、一見無意味で退屈なものにみえて、実は中世の平曲の聴衆にとっては、具体的なイメージを描き得る親しみ深い武人名の列挙であったろうことはすでに説かれている。②

『曽我物語』にも物揃え文は豊富である。たとえば相撲の技を

内搦（うちがらみ）・外搦・迎搦・入搦・手斧懸（てをのかけ）・入跡（いりけ）・爪跡・逆手跡・腕級（うでくみ）・前亘（まへわたり）・後亘・走亘・小頸懸・手房取（たぶさとり）・胸偕（むなそり）・辻搏（つじつかみ）・皮腹取（ひばらとり）と申す相撲の取手どもその数を尽す。（巻一）③

と並べたてる如き名詞の列挙は随所に見られ、特に巻八の富士野の巻狩の記述においては、

一番には、相模の国の住人に愛敬三郎と本間次郎ぞ出でにける。愛敬三郎がその日の装束は、下には師子に牡丹の織物の小袖に、上は嶋摺の松原に鶴を飛ばせたる直垂に、（後略）[4]

といった大名武士団の国名・人名・装束のさまが、二十番まで四十人にわたり延々と繰り返されているのである。この物揃えが、曽我兄弟の仇討ちが終結へと向かう箇所に置かれていることからみて、物語の展開における聴き所、聴かせ所であったろうことは疑う余地もなく、まさしく趣向性・場面性の一極点となっている[5]のである。

ところで、そこに見える装束についての詳細な描写は、軍記物での武士の装束揃えをはじめとし、幸若舞曲の「敦盛」や「烏帽子折」などに見られ、類型描写としてすでに論ぜられている[6]ところである。特に「烏帽子折」のそれは、「浄瑠璃姫物語」の御曹司装束揃えと相通じる点多く[7]注目されるが、舞曲には他にも「那須与一」の見物人揃え、「馬揃」の名馬揃えなど、物揃えの豊富さは枚挙にいとまがない。

このほか狂言「鳥説経」での鳥の名の列挙や「名取川」の川尽くし、「鳴子」の引き物尽くしがあり[8]、謡曲や歌舞伎のつらねに見られることは言うまでもなかろう。

しかしながら「浄瑠璃姫物語」におけるそれは、さながら「言葉に花を咲かす[9]」が如くの豊饒さを見せており[10]、本稿が考察の対象として措定する所以である。

さて、これまで日本の物揃えについて概略見てきたが、これと類似のものが、韓国の語り物（口碑演唱物）であるパンソリや巫歌に発見できる。もちろん語り物以外の文学作品にも見えるもので、たとえば高麗時代一三世紀中頃の「翰林別曲[11]」が挙げられる。これは儒臣文人の手になる歌であって、その第一節から八節には、詩文・書籍・名筆・名酒・名花・音楽・楼閣・鞦韆についての固有名詞をそれぞれ列挙し、その景趣を「ああ、その光景はいかがなものでござるか」と讃える内容となっている。いわゆる両班文学での一例として特筆すべきである。また歌辞文学の「農歌月令歌」は、農家での行事・風俗について、一月から十二月まで詳細に事柄を列挙して、一幅の歳時風俗画を描くかのようであり、民謡や雑歌にも多いが、やはり物揃えに類する表現の古態を示しているのは、巫堂（ムーダン）の語る巫歌であろう。

その事例を少し示すと、ソウル地域で行われる「財数クッ[12]」は、まず「不浄コリ」からその巫儀が始まるが、その辞説（サソル）は、

座りて見たる不浄、立ちて聞きし不浄、眼より入りし不浄、耳より入りし不浄、手に触れたる不浄、口に唱えし不浄（後略）[13]

とさまざまな不浄を列挙する、言うならば不浄揃えをなし、そのあとそれら全ての不浄を「追い払いたまえ」と祈願し結んでいる。ま

た続いて、胡鬼神、帝釈神、将軍神、大監神、マルミョンの各神名列挙がずらりと語られており、全篇これ物揃えと言っても過言でない。巫歌に見られる物揃えは、このソウル地域に限らず、済州島のポンプリ（本解）や各地方の巫歌に多種多様に見られるのである。[14]

しかし何といっても物揃えに類する表現様式が、作品中に趣向化され文芸的色彩を放っているのはパンソリのようである。ここで現伝するパンソリ系小説や唱本の全てに言及できないが、たとえば「沈清歌（伝）」の花草打令（花揃え）や開眼尽くし、「興夫歌（伝）」のカナン打令（貧尽くし）やトン打令（金尽くし）、割った瓠から出てきた織物を揃えたピダン辞説、また「赤壁歌」のセー打令（鳥尽くし）や「水宮歌（鼈兎伝）」の薬性歌（薬揃え）、トッキ画像（兎の画揃え）などを挙げておくことにする。[15]

とりわけ世界的によく知られている「春伝歌（伝）」にも、もちろん豊富に見られるが、同時にこの作品が、先述の「浄瑠璃姫物語」と顕著な類似性を示すということから、この二作品をまず取り挙げてみることにしたい。

二　『浄瑠璃姫物語』と『春香伝』

三河国矢作宿の長者の娘浄瑠璃と、御曹司源義経との恋の物語である「浄瑠璃姫物語」は、室町時代から江戸時代初にかけて広く愛好された物語である。一方「春香伝」[16]は、全羅道南原の名妓の娘春香と両班の子弟李夢龍との恋物語となっている。貞節を守り抜き身分の違いをのりこえて愛を成就させたストーリーは、朝鮮朝後期の民衆の喝采を得て大いに愛好され、今日までもパンソリに歌劇にと演唱されている民族的傑作である。

本稿でこの二つの作品を取り挙げるのは、まずそれらに物揃えの表現、趣向が豊かであるからで、浄瑠璃とパンソリという二種の語り物の叙述表現面の特徴を対比するのに、好適な比較対象となると考えたからである。今一つは、これまで「春香伝」は、「西廂記」「桃花扇」など中国の作品との比較研究がされてきたもの[17]の、日本の語り物作品とのそれはまだ進められておらず、「春香伝」と「浄瑠璃姫物語」が類似性を示すということをここに指摘したいからである。もちろん本稿は日本と韓国における先学諸氏の研究成果をふまえ、それに導かれて成るものであることを記しておきたい。

さて、「浄瑠璃姫物語」と「春香伝」とを対比してまず気づくのは、そこに描かれた恋の過程が非常によく似ていることである。御曹司と浄瑠璃の見染めと出逢い、その夜の忍び入り、口説から契りを結び、そして別れという展開と、「春香伝」での李道令が見染めての出逢いとその夜の忍び入り、口説から結縁、そして離別という恋の場面展開が、

見染め→出逢い→別れ→忍び入り→口説→契り→別離

となっており、[18]際立った類似性を見せているのである。

もちろん、男女の恋物語は古今東西に星の数ほどあり、こうした出逢いと別れの筋展開もありふれた或いは偶然のものだとする向きがあるかも知れない。しかし、この出逢いから別れに至る過程が、場面化され趣向化されて抒情的色彩をそえて描き出されていること、かつまたその描写が物揃えを核とした叙述のつながりから成り立っているという類似点は、他の作品に容易に見出し難い。

今、「浄瑠璃姫物語」から『十二段草子』[19]（二冊・奈良絵本・大東急記念文庫蔵）を、「春香伝」からは『南原古詞』[20]（五巻・五冊・写本・パリ東洋語学校蔵）を措定して、出逢いから契りに至る部分に見られる物揃えとそれに類する表現を取り出してみると、次の表のようになる。[21]

	『十二段草子』	『南原古詞』
一段	峯の薬師の貢ぎ物揃え	巻一 序詞 ナギィチレ（驢馬の飾り揃え）
二	道行文	李道令衣服丹粧チレ（容姿・衣裳揃え）
三	見染め 泉水揃え	山川景概プリ（名勝地揃え）
	浄瑠璃御前の容姿	セー打令（鳥揃えの歌）
	草子尽くし	
	浄瑠璃御前の装束	
	美人揃え	
四		御曹司装束揃え
五		たとえ尽くし（女房を諫める）
六		使いの者（七度）
		浄瑠璃御前の宿所の結構
		四方障子の絵揃え
		座敷の結構尽くし
		笛の名手揃え
七		御曹司宵の装束
八	忍び入り	浄瑠璃御前宵の装束
九		たとえ尽くし（志賀寺の上人・なびく恋尽くし）
十		挿話（西行法師「あこぎ」の故事）
十一		浄瑠璃御前の風情のたとえ尽くし（謎かけことば）
		返歌（謎かけことばの解き歌）
		及ばぬ恋をするもの尽くし
	契り	
		巻二 見染め
		忍び入り
		契り
		春香衣服丹粧チレ（容姿・衣裳揃え）
		金玉辞説（譬え問答揃え）
		書冊プリ（四書三経の初句読み揃え）
		ポゴヂゴ歌（逢いたし尽くし歌）
		チブチレ（屋敷の結構と庭苑揃え）
		四壁図辞説（四方の壁画揃え）
		セガン器皿辞説（調度品揃え）
		タムベ辞説（たばこ揃え）
		酒肴辞説（酒瓶・酒・酒肴揃え）
		勧酒歌・白鷗詞
		歌詞・千字プリ・バリ歌・徳韻歌（弾琴歌）
		批点歌（批点尽くし歌）
		因字打令（因の字尽くし）
		縁字打令（縁の字尽くし）

この表から、『十二段草子』では「―揃え」「―尽くし」とそれに準じたものによって、また『南原古詞』では「―プリ」「―チレ」「―辞説（サソル）」「―打令（ターリョン）」や歌謡によって、物語

が進展していることが見て取れよう。これら四種の呼称をもつ叙述表現こそは、日本の「物揃え」と同じ形態と機能をもつと考えられる、パンソリ辞説の重要な表現様式なのである。

さらにこれらの中から、両作品において著しい類似性を示す類型描写として、次の四点を挙げることができる。

㈠浄瑠璃御前・春香についての人物描写
- 。容姿の描写
- 。衣服丹粧チレ
- 。芸能・品性の描写
- 。金玉辞説
- 。装束の描写
- 。芸能・品性の描写
- 。美人揃え

㈡御曹司・李道令についての人物描写
- 。装束揃え
- 。衣服丹粧チレ
- 。笛の名手揃え
- 。書冊プリ
- 。ポゴヂゴ歌

㈢浄瑠璃御前・春香の屋敷と庭園の描写
- 。泉水揃え
- 。チブチレ

㈣浄瑠璃御前・春香の部屋の描写
- 。宿所の結構
- 。四壁図辞説
- 。四方障子の絵揃え
- 。セガン器皿辞説
- 。屋敷の結構尽くし
- 。タムベ辞説
- 。酒肴辞説

これら四点のうち、㈠㈡は、男女の主人公についての人物描写であり、㈢㈣は、男性主人公が女性主人公の屋敷を窺き見、忍び入る場面での描写となっている。特に注目されるのは、㈢の庭園の景観を四方に分けて詳細に描く「泉水揃え」と一方の「チブチレ」との類似、また㈣での四方の障子の四季の絵を語る「四方障子の絵揃え」と、同じく四方の壁の画を描く「四壁図辞説」であり、その趣向の酷似性は驚くほどで興味深いところであるが、ここではまず、㈠について、美人の形容がどうなされているかを見ていくことにする。

三　浄瑠璃御前と春香の人物描写

浄瑠璃御前の美しさは、御曹司をして「いまだかやうの美人見ず……男子の身と生まれなば、かやうの人に一夜なりとも逢いなれ近づき奉り、連理比翼の契りをこめ」たいと思わせる程であるという。その本文は、容姿の面、芸能・品性の面、装束の三側面から描いたあと、あまたの美人名を並べそれよりなお美しいと強調している。

春香もまた、遙か緑林の隙に鞦韆にたわむれる姿を見た李道令をして、「顔は紅潮、心はうっとり、気は乱れ眼は朦朧、意思は豪宕身も心も恍惚」ならしめる程の美人であるという。その本文は、容

姿衣裳を描く衣服丹粧チレ、芸能・品性を叙す一文、そして美人揃えに該当する金玉辞説を配してあり、浄瑠璃御前の場合とほぼ同様の描写方法であることがわかる。では以下において、美人の形容の種々相について順次見ていくことにしよう。

1　容姿の描写

浄瑠璃御前の眉目容姿は、「かたちは春の花の色、姿は秋の月にて、三十二相八十種好を連ねたる、情ありまの美人なり」と、その全体像を叙したあと、

みとりのまゆすみ、ほそやかに、ふよふのまなしり、こひあつて、たんくわのくちひる、うつくしく、けんろのおとかい、たるにして、しつはらとをの、ゆひまても、るりをのへたに、ことならす、いしやうに、たきもの、せられ共、らんしやの、にほひ、かうはしく、たけなるかみの、かんさしを、せいたひか、たとへたに、こうろきのすみ、すりなかしてみることく、

と描いている。これを見ると、眉・眦・唇・頤・指・薫物・髪といった容貌容姿の部分を一つずつ取り挙げ、それぞれに修辞を施し列挙するという方法で、美しさを描き出していることがわかる。つまり、トータルとしての美しさを、部分毎の多様な形容で表わそうとする物揃えの方法なのである。

これと類似の表現は、御伽草子「物くさ太郎」「さいき」や「花みつ」等に見えており、[22] 美人を表わす常套的な表現としてあったと思われるが、とりわけ指についての形容「しつはらとをの、ゆひまても、るりをのへたに、ことならす」とあるのは注目すべきである。十本の指までも瑠璃を延ばしたように美しい[23]というこの形容は、奥浄瑠璃「迫合戦」に見える[24]だけでなく、壱岐のイチジューの語り物「百合若説経」では、輝日御前の美しさを「十はら十ヲの御ゆびまで瑠璃をのべたる如也[25]」としており、さらにオシラ祭文「きまん長者物語」に、長者が娘たけや姫を「じつぱら十の指迄も、ゆ(ママ)りをのべたる如くなり[26]」と形容していることを考えあわせると、これが美人を表わす常套句として広く語りの世界にあって、世人の好尚を得たものであったろうと推測されるのである。

ところで、容姿描写の詞章には、

かたちははるの　はなのいろ
みとりのまゆすみ　ほそやかに
しつはらとをの　ゆひまても

のような、七音・五音の一二音を一区切りとした言葉の連なりが見えてくる。これらの表現の口調の良さとリズム感は、この物揃えが音曲を伴って語られたことを思わしめる。文字を目で追えば冗長で単調な物揃え文も、音曲にのれば、心地よく聴き手に響いて感興を

引き起こしたことと思われるのである。

では次に、春香の場合を見ていくことにする。その容姿は、

眼をあげて、ちょうど一所を眺むるに、別有天地の画の中に、ひとりの美人が春興に誘われて、白玉の如き美しきさま、薄化粧にととのえて、皓歯丹唇、麗しの顔、三色桃花のつぼみの、一夜の露に半ば咲きしよう、青山が如き両の眉、八字春山をなし、黒雲が如き乱れ髪、半月形の画龍梳にて、さらさらと梳けづり、剪板の如く広幅に編み結び、玉龍簪に金鳳釵で、セアンの型に飾り止め、黄真珠に珊瑚のついたトラクテンギを、小意気に飾りしそのさまは、天台山の碧桐枝の鳳凰が尾の如し。

と描かれている。ここにも浄瑠璃御前の場合のように、容姿の部分を一つずつ取り挙げ形容し、列挙することで全体を表わそうとする方法がうかがえる。さらにその音数律を見ると「별유천지 그림속에」「백옥같은 고운양자 반분대로 다스리고」のように、四・四調を基本とする[27]八字や一六字の区切れがあり、パンソリ演唱の長短（リズム）にかなっていることがわかるのである。

ここで容姿描写に列挙されたものを対比してみると、

浄瑠璃―眉・眦・唇・頤・指・薫物・髪

春　香―歯・唇・眉・髪・簪と釵子・テンギ

となる。浄瑠璃御前に頤や指、薫物があり、春香に歯が挙げられている点が目につき、髪の様子を取り挙げても、浄瑠璃御前の方では「青黛が立板に香爐木の墨すり流してみる如く」と墨色に譬えるのに対し、春香の方は雲に譬え、さらに髪結の型や飾り物にも関心を示すといった具合である。しかしこのような相異はむしろ当然とすべきで、二つの作品を育んだ文化と時代の違いが見えて興味深い。なお面白いのは、春香の描写の終わりの箇所である。髪にテンギ（布製のリボン）を飾りつけた様子を、中国の仙霞嶺である天台山の碧桐の枝に宿るという鳳凰の尾羽に譬えているが、鳳凰は本来聖徳な天子の出現に譬える瑞鳥であってみれば、少なからず誇張した滑稽味さえある表現で形容を終えているわけである。いずれにせよ、物揃えの表現方法が、春香の容姿描写においても有効に機能していることが認められるのである。

一面、個々に切断された容姿のつぎはぎのようにも見えるこれらの表現も、その一つ一つの形容が列挙されていく時、さらにその言葉の積み重ねが音曲にのせられる時、美人像に生命が吹き込まれるのではないだろうか。浄瑠璃御前も春香も、物揃えのもつそうしたイメージの喚起力によって、語りの場に、その生き生きとした姿を立ち現わすことになるのであろう。

2　芸能・品性の描写

浄瑠璃御前の芸能[29]については、「琵琶の上手に琴の一、仮名の上手に真名の一」の叙述から始まって、管弦にたけ教養ある才媛ぶりが、各種の芸能列挙のもとに描かれている。それは、和歌、漢詩、筆、さらに盤の上の遊びまでを挙げ、すべてに秀でていると讃める、いわば芸能讃めの一文となっている。たとえば筆を讃めるのに、「筆をとりては」の起句に続き北野の天神（菅原道真）・弘法大師・小野道風・金岡絵師の名を並べ、「これにはいかでかまさるべき」で締め括るという、語りの巧みなパターン化が見えている。

わけても教養の深さを表わす「草子尽くし」という典型的な物揃え文を挿入しているのは注目される。語り物に常套的に用いられる「読みける草子は何々ぞ」の語り起こしのあと、草子の名が列挙されていくが、それは、

源氏・狭衣・しじら・落窪・京太郎・古今・万葉・伊勢物語・百四帖の虫尽くし・八十四帖の草尽くし

という数である。草子名が並べられるだけで、修辞の一切つかないこの単調な列挙も、諸本でのそれを対比してみると[30]、並べ方にそれなりの決まりがあることがわかる。というのは、

源氏・狭衣・恋尽くし
しじら・落窪・京太郎
古今・万葉・伊勢物語
百四帖の虫尽くし・八十四帖の草尽くし

などが一つの単位となって並んでいるのが認められるからである。さらにこの一単位に七・五音の音数律があり、語られる際の口調のよさと聴いての心地よさが感ぜられるのであって、草子尽くしも音曲と深い関わりのあることが知られる。

さて、春香の芸能・品性についてはどう描かれているであろうか。

春光（年齢）は二八にして、人物（容貌）は一色なり、行実（品行）は白玉のごと、才質は蘇若蘭、風月は薛濤、歌曲は蟾月なり。いまだ定めし夫はなく、情は薄く小生意気、驕慢なるその振舞は、霊霄宝殿の北極天門に顎をかけたる如くなり。

とあるように、年齢は一六歳、容貌は美人としたあとに、品性と芸能を挙げ叙しているが、取り挙げた事柄は、

浄瑠璃――琵琶・琴・仮名・真名・草子・和歌・漢詩・盤の上の遊び・情
春　香――行実（品行）・才質・風月・歌曲・情

となり、浄瑠璃御前の場合と比べその項目は少なく、また修辞ももっぱら直喩法によった簡潔なものであるのが、特徴として言えそうだ。しかし、今日演唱されている金素姫氏唱本「春香歌」には

荘・姜の色に、李・杜の文章なり、太姒の和順心と、二妃の貞節を、その胸に抱きし、今天下の美人なり、万古女の中の君子なり、[31]

と歌唱されており、同様の列挙法がうかがえ、人物描写における類型的手法であることがわかる。ここでもやはり直喩法に中国の人名を多く引いているのだが、一体に修辞法の歴史からみて、直喩法などはもっとも単純なものではなかろうか。巧妙なレトリックや意表をつく隠喩など発達した修辞法から見れば、プリミティヴなものと言えよう。しかるにそうした直喩法によった形容が、物揃えにおいては、むしろ有効である事例がここに見出せそうである。先述した浄瑠璃御前の筆について語るくだりで、北野の天神や弘法大師等の名を聴く時、聴き手はその名だけで思い浮かぶものがあったはずである。同様に、春香に譬えた蘇若蘭や蟾月、李白や杜牧の名も当時に一般化した名で、何らかのイメージを引き起こしたに違いなく、直喩法の端的な表現が、リズムにのってその機能を発揮するのだと言えよう。

ところが、続く春香の品性の叙述は意外な展開を見せている。すなわち、春香の小生意気で驕慢なことをあげて、玉皇上帝の宮殿にある北極天門という実在しない天上の門に顎をひっかけたようであるという、極端に誇張した滑稽表現で形容しているわけである。前半ではその芸能・品性を讃めておきながら、終わりに至ってはそれと打って変わった滑稽味のある表現へと、一八〇度転換してしまっている。つまるところこれは、美人を形容する正統な類型表現を列挙したあと、あたかもそれらを顚倒させるかのような滑稽表現で締め括るという手法なのである。前述の浄瑠璃御前を「情の道を知る事も当国一」とのみ描くのとは大きな相違を見せているのであるが、こうした滑稽化の手法はパンソリの他の作品にも豊富に見出せ、パンソリの本質をなす特徴[32]といえるものである。

3　装束の描写

浄瑠璃御前の装束描写は、

しやうるり御せんの、そのひの、しやうそく、いつにもすくれて、はなやか也、はたにとりては、ねりいろ、からあや、きくなてしこ、十二ひとへを、めすまゝに、

とあるだけで簡潔である。八段にも「宵の装束」について再度の描写があるが、いずれにも身に着けた衣装を一点ずつ挙げて、その色と柄を示して描く列挙の方法が見い出せる。むしろそのあと、「立たれたりけるその風情を物によく〳〵譬うるに」の起句を語って、昆沙門の妹吉祥天女・鬼が娘の十郎御前・蝦夷が娘の島王御前を並べて、「これにはいかでかまさるべき」と語り結ぶ一文が続くのをみると、風情の形容に関心があるようである。

一方、春香の衣裳は、容姿にすぐ続いて、

唐苧の単上衣、草緑薄絹の上衣、白紋亢羅の下袴、桃色薄絹の広幅袴、柳の如き細腰を蜀羅の腰帯で結び締め、龍紋薄絹、桃紅色の下衣を、ひだも細やかに身にまとい（後略）

といった形容が展開するが、まず気づくのは、衣裳の材料である織物の種類とその色柄とを必ず示し、それを身につけるさまも間々に加えながら、列挙を進めていることである。なおかつその形容が、「백문항라 고장바지」「죽라요대 눌러띠고」のように、四字の中に巧みに収めて八字に構成し、四・四調のリズムにかなうよう工夫を凝らしてあることである。取り挙げられた品は、

浄瑠璃――十二単

春　香――単上衣・上衣・下袴・広幅袴・腰帯・下衣・ポソン（足袋）・鞋・佩物（胸飾り）・香嚢

であり、春香は上から足先までの衣裳と副装品の数々の列挙によって描かれていることがわかろう。一方浄瑠璃御前の装束描写が比較的簡潔であるのは、男性主人公御曹司の装束揃えが、長文の豪奢な内容となっているのと関わりがあるようで、それとの対比からむしろ考察すべきであるが、詳述は別の機会に譲ることとする。

いずれにしろ春香の衣装描写が、物揃えといえる表現方法に拠っていることは明らかであるが、注目すべきは最後の香嚢についての形容である。香嚢を身につけたその様子を、

両局大将が兵府（割符）を着けたるよう、南北兵使が弓矢袋をぶら下げたるよう、村々の通引（役人）が文房道具をぶら下げたるように、長ったらしくつるし下げ、

と描いている。つまり、大将や武官といったおよそ美人の形容にそぐわない男性や、地方官庁の雑用をする役人の通俗的な例を持ち出して、その職業を示す道具を身につけた様子に譬えているのであるから、それまでの容姿端麗であでやかな春香の形容は、あえなく転覆させられた格好となる。格調高く正統な形容を施したあとに、滑稽表現を挿しはさんで楽しもうとする、一種の遊びの手法なのである。こうした誇張化、滑稽化は、前述の１２で指摘した手法と同様のものである。浄瑠璃御前が、１２３を通して一貫して優美で上品に描かれているのとは対照的と言えよう。

しかしながら、このような滑稽味溢れる表現、諧謔表現にこそ、パンソリの真骨頂があるのであり、パンソリを演唱した広大（クワンデ）が本領とする遊戯精神、「広大笑謔之戯[33]」なるものがうかがえるのである。

4　美人揃えと金玉辞説

浄瑠璃御前の容姿、芸能・品性、装束の描写に続いて、美人揃え

なる一文が置かれている。「ここに美人を尋ぬるに」の起句のあと、古今東西の美人の名が並べられている。諸本より代表格となりそうな四種の美人揃えを取り出し、そこに挙げられた美人名を次に掲出してみよう。

A十二段草子	B山崎旧蔵写本	C慶長古活字版本	D寛永初京都版正本
橋本のおとつる	和泉式部	楊貴妃	唐の楊貴妃
手越の少将	小式部	李夫人	昆沙門の妹吉祥天女
入間川の牡丹御前	まつらさよ姫	衣通姫	桐壺
塔の辻のひとまる	玉藻の前	女三の宮	は、き木
大磯の虎	唐の楊貴妃	朧月夜の尚侍	若紫
黄瀬川に亀鶴	衣通姫	弘徽殿の細殿	衣通姫
てわふしん	鳥羽の院の后		和泉式部
衣通姫	染殿院		小式部
かんの楊貴妃	観音の妹勢至御前		紫式部
舎指(脂)夫人	昆沙門の妹吉祥天女		染殿院
女三の宮	くわようふにう		朧月夜の尚侍
朧(月)夜の尚侍	小野小町		女三の宮
弘徽殿の細殿			玉かつら
小野小町			玉藻の前
和泉式部			小野小町
小式部			玉世の姫
紫式部			
染殿院			
とは(鳥羽カ)の天女			

この四本の美人揃えを見比べてまず気づくのは、各本各様で、ヴァリエーションに富んでいることである。楊貴妃のように、四本に共通して出ている人名もあれば、他本にはない特異な人名も見えており、その数もAの一九名に及ぶものから、Cの如き簡略なものもあるといった具合にさまざまで、また人名の並び方も一定ではない。

こういった特徴は、ひと言で言うなら「語りの流動性」に起因するものと考えられ、語りの可変性、即興性がそこにうかがえるものである。特に目を引くのは、四伝本中で美人名のもっとも多いAの、冒頭から六名の人名である。このうち手越の少将、大磯の虎、黄瀬川の亀鶴の名は、周知の如く『曽我物語』に

黄瀬川に亀鶴、手越に少将、大磯に虎とて、海道一の遊君ぞかし。[34]

とあって、東国の美人名であることが知られ、牡丹御前についても、御伽草子「唐糸さうし」に

武蔵国、入間川の、牡丹といひし、白拍子[35]

と見えていることから、やはり東国の美人名であることがわかる。残る「はしもとのおとつる」と「たうのつしの人まる」については未詳のようであるが[36]、「はしもと」は、静岡県にある中世より東海道の要衝の宿である橋本[37]と考えられ、「たうのつし」は鎌倉市の中世以来の地名である塔の辻[38]にあたるとして妥当であろう。してみれば、「乙鶴」や「人丸」の名も恐らくその地における女性の名であろうと考えられるわけで、六名の名はいずれも東国の美人名という

ことになる。とすれば、それらが何よりもまず冒頭にずらりと並べられているAの美人揃えは、東国色の濃いものと言えそうだ。このことは、十番目に置かれている「しゆしふにん」が未詳のようであるものの、関東の唱導関係者の手になるとされる『神道集』に見える「舎指（脂）夫人」[39]と判断できることからも言える。

つまるところAは、東国でのローカルな語りの姿を見せる伝本であろうと考えられるのである。さらに一歩踏み込めば、六名の人名全てに地名を冠してあるという、他本に見られない際立った特色をもつことから、A本の古態性もうかがえると言えまいか。

以上、Aの美人揃えについての若干の指摘を試みたのであるが、次に音曲面を考えるなら、AからBの本文におしなべて、「ここに美人を尋ぬるに」等の起句があり、続く人名列挙を受けて「と申とも、これにはいかでかまさるべき」という結句で終えるというパターンは、音曲を伴う語りの常套的なものである。人名の並び方に「和泉式部に小式部に」「紫式部に染殿院」などの口調のよさがある点もまた、語りの特色であること縷々述べたところである。

ところで、数ある美人名をずらずらと列挙するのは、単にその美しさを譬えるためだけとは解せない。恐らく美人の名は、当代の聴き手にとっては身近なものとしてあり、その一人一人の名を語ることは、その名にまつわる逸話や物語などを想起するという楽しみも提供したのではないかと思われるのである。そしてそのことは、修辞をほとんど施さない固有名詞の列挙において、より効果的だったのではあるまいか。人名を列挙するだけで、あとは享受者の想像に任せるという、語り手の手法が、こうした人名列挙にうかがえよう。

さて、「春香伝」において、美人揃えに該当すると考えられるのは「金玉辞説」である。金玉辞説は、ほとんどの伝本に見えており、『南原古詞』の場合もやはり、若き貴公子李道令と下僕である房子（パンジャ）との、掛け合いの問答形式の一文で、演劇的趣向の施された場面を見せている。南原の名勝地広寒楼へと出かけた李道令は、彼方に何やらちらちらと見え隠れするものを見つけ（実は鞦韆に遊ぶ春香である）、房子に仙女が天から舞い降りたようだと譬える。それに対して房子は、

房子・巫山十二峰にござりませぬゆえ仙女がここにおりましょうぞ。

道令・ならば淑娘子[40]であるか。

房子・梨花亭にござりませぬゆえ淑娘子とは一体なんと。

道令・ならば西施であるな。

房子・呉王の宮中にござりませぬゆえ西施と申せましょうか。

道令・それならば玉真であるな。

房子・長生殿にござりませぬゆえ楊貴妃がおりましょうぞ。

（後略）

のように答えを返すという問答が、繰り返されていく。そして問答の列挙の後に、房子はその正体を「この邑の妓生（キーセン）月梅が娘、春香なり」と明かすことになる。いわば春香の名告りを房子が替わってするのであるが、名告りに至るまでの譬えを諸本から取り出すと、

Ⓐ南原古詞	Ⓑ別春香伝	Ⓒ李古本	Ⓓ列女春香守節歌	Ⓔ金素姫唱本
神仙　魂魄	金	仙女	西施	金
仙女　日月	玉	金	虞美人	玉
淑娘子　ネーオミ	神仙	玉	王昭君	海棠花
西施　ネーハルミ	鬼神	海棠花	班婕妤	鬼神
玉真　プルヨホ		鬼神	趙飛燕	
金		トッカビ	洛浦仙女	
玉		クミホ	巫山仙女	
桃花		ネーハルミ		
鬼神		ネーチョッピ		

である。

各本に必ず金・玉が見られるように、古来珍重された金・玉に春香が譬えられるところから金玉辞説の名があるわけだが、各本での譬えとその数には異同が大きくさまざまである。物揃えの箇所でのこのような多様性は、物語の筋展開と直接関わらない所で、その内容が拡張、敷衍或いは縮約されることがあるという、語りの可変性を如実に示すものといえ、先の美人揃えに相通じる側面であると言えよう。

さて表からわかるように、Ⓐでは、初めの方には淑娘子・西施・玉真といった美人名が並ぶが、後になると鬼神や魂魄など美人と縁のない語が出てき、ついにはネーオミ（お前の母さん）、ネーハルミ（お前の婆さん）、そしてプルヨホ（女狐）といった卑語へと展開している。まるで春香の譬えであることなど忘れ去り、掛け合いの面白さに埋没したかのようである。最後の卑語など、両班の口からは決して発することのない悪口雑言であるにもかかわらず、李道令に言わしめており、両班への諷刺・嘲弄をカモフラージュした巧妙な滑稽表現になっている。

このように、金玉辞説においても、格調高く正統なる列挙のあとに滑稽表現を挿し入れるという手法が見出せるのであり、ここにもまた、広大の知的遊戯、戯画化の手法が発揮されているのである。

四　物揃えと滑稽表現

これまで三において、浄瑠璃御前と春香の人物描写の種々相を比較検討してきたが、その結果、容姿、芸能・品性、装束の三側面から描くという点が共通し、その描写が類型的になされているという類似性が認められた。さらにそれらの類型描写に、物揃えの表現様

式が有効に機能していることが確められた。起句と結句による語りのパターンも両者に見出せ、音曲性に富むことも知られた。

しかし、物を揃えるという様式が両者に共通するものの、そこに挙げられた事物や事柄には相異も見られ、二種の語り物「浄瑠璃」と「パンソリ」が生成した文化や歴史の違いを示すという一面もうかがえた。さらに二者間の相違点として特に目についたのは、春香の物揃え表現の終わりの箇所に滑稽表現が見られたことである。浄瑠璃御前の描写にそれが見出せないのは、この作品が悲劇的結末であることと関わりがあると思われる。というのは、「判官贔屓[41]」という語が示すように、御曹司義経は悲劇の英雄として伝説や物語類に多く描かれており、「浄瑠璃姫物語」がそうした判官物の作品群に入れることもできるからである。

しかしながら滑稽化の手法は、日本の他の作品に見い出せる。たとえば物揃えの終わりの部分に滑稽表現を挿し入れる事例は、『神道集』巻第十「諏方縁起」に見受けられる[43]。すなわち、甲賀三郎が春日姫を求めてめぐる国々の山嶽の名を、六十八カ国にわたって一つ一つ列挙しているが、その国尽くし山尽くしが終わりの方になると、

豊後国伏菟御嶽詐山、肥前国議御嶽罷山、肥後国誇御嶽贅田山、日向国嘲御嶽粽山、……壱岐国大江御嶽誣山尋廻恋人合[44]

となっている。ここに見える「詐り山」「議り御嶽」「嘲るの御嶽[45]」そして「誣山」などのふざけた名がそれである。柳田国男翁はこれについて、「全く自由な思付きを以て、どし〳〵と山嶽の名をこしらへて、別に気が咎めたやうな様子も無い」と評し、さらに「もう聴き飽きた人たちに、少しは笑はせてやらうといふ趣意で、もあつたものか[46]」とされている。このようにこの表現は、語り手の「地理知識を見せるとともに、聴き手が退屈しないように適当に遊びを交えた[46]」滑稽表現であり、遊戯表現でもあるわけだ。さらに、それが山尽くしの最後に置かれているという点、先述のパンソリの場合と全く同じ手法といえまいか。つまり聴き手を語りの世界へ誘引するのが語り手の手腕であるなら、冗長な語りのあいまに、退屈ざましの滑稽表現をアクセントに挿しはさむのもまた、語り手の巧みな手法であることが、こうした事例からうかがい知れるのである。

さらに御伽草子にもある。「物くさ太郎」に登場する物くさ太郎ひぢかずといえば、周知の如く竹四本にこもを掛けた見すぼらしい小屋に、汚い恰好でごろりと寝ころんでばかりいる「のさ者[47]」である。ところが彼の家の有様はこう描き出されている。

家づくりのありさま、人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立、東西南北に池を堀、嶋をつき、

松杉を植へ、島より陸地へそり橋をかけ高欄に擬寶珠をみがき、まことに結構世にこえたり。十二間の遠侍、九間の渡り廊下、釣殿細殿梅壺、桐壺籬が壺に至る迄、百種の花を植へ、主殿十二間につくり、檜皮葺に葺かせ、錦をもつて天井をはり、桁うつばり、たる木の組入（れ）には、銀金を金物にうち、瓔珞の御簾をかけ、馬屋侍所にいたる迄、ゆゝしくつくり立て居ばやと、心には思へ共、いろ〳〵事足らねば、たゞ竹を四本立て、こもをかけてぞ居たりける。[48]（加点引用者）

豪華絢爛たる貴族の屋敷を描いたあとに来る、どんでん返しのような滑稽さは、聴く者をして存分に楽しませたに違いない。これもまた、泉水揃えや屋敷の結構揃えのあとに置かれた滑稽表現なのである。まさに物揃え様式の趣向化の好例といえよう。このような意外な展開、機智に富んだ趣向は、室町時代人の好んだところであり、をかしやもどき、もじりの系譜につながるものなのである。

さて、本稿では「浄瑠璃姫物語」と「春香伝」の二作品について、物揃えに着目し比較考察を試みたのであるが、物揃えの本質や滑稽表現については、広く他の作品にあたり考察を深めていく必要があろう。とりわけ、近世の語り物、特に近松門左衛門の作文になる新浄瑠璃の厖大な作品は、物揃えのさまざまな形態と、もじりや茶化しパロディーの種々相を見せてくれる魅力ある研究対象としてある。また、パンソリの他の作品における物揃え表現と滑稽才談、現行の唱本とパンソリ系小説との関係、語りの演劇性・芸能性と物揃えの機能等、なお多角的な研究を進めていくことが望まれるところである。

注

① 高木市之助氏他校注『平家物語上』日本古典文学大系、岩波書店、一九五九。

② 加美宏氏「巻四」『国文学』学燈社、一九六八年一〇月号、五四頁。

③ 青木晃氏他編『真名本曽我物語1』平凡社、一九八七。

④ 笹川祥生氏他編『真名本曽我物語2』平凡社、一九八八。

⑤ 加美宏氏「『曽我物語』―復讐の文学―」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、一九八八、一二月号、九五頁。

⑥ 麻原美子氏『幸若舞曲考』新典社、一九八〇など。

⑦ 島津久基氏『義経伝説と文学』（明治書院、一九三五）に指摘が見られる。

⑧ 芸能史研究会編『日本の古典芸能4狂言』平凡社、一九七〇、二〇頁及び一〇四頁。

⑨ 大岡信氏「言葉に花を咲かすこと」『文学』岩波書店、一九七六、九月号、一三二頁。

⑩ 黒木勘蔵氏『浄瑠璃史』（青磁社、一九四三、五四頁）、室木弥太郎氏『増訂語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』（風間書房、一九八一、四三四―五頁）、荒木良雄氏『安土桃山時代文学史』（角川書店、一九六九、四五七頁）、徳田和夫氏「『浄瑠璃十二段草子』をめぐって」（『国文学解

釈と鑑賞』一九八九、五月号、六六頁）などに指摘がある。

⑪ 李秉岐・白鐵氏『国文学全史』ソウル新丘文化社、一九七二、一〇一―六頁。

⑫ 金泰坤氏『韓国巫歌集1』ソウル集文堂、一九七一、一〇頁に「財数クッ」は財福と幸運を祈願する祭儀であるとある。

⑬ 注⑫の一三頁。

⑭ 注⑫の1から5集。また崔正如・徐大錫氏『東海岸巫歌』螢雪出版社、一九七四。玄容駿氏『済州島巫俗事典』新丘文化社、一九八〇。等を参照。

⑮ パンソリ作品のうち申在孝本の四篇については姜漠永・田中明氏訳注『パンソリ』（東洋文庫、平凡社、一九八二）がある。

⑯ 日本語訳に許南麒氏訳注『春香伝』（岩波文庫、一九五六）等がある。

⑰ 丁来東氏「春香伝に影響を及ぼした中国の作品」『大東文化研究』第一輯、ソウル、一九六三等がある。

⑱ 信多純一氏「浄瑠璃本の挿絵」『図説日本の古典・近松門左衛門』集英社、一九八九、一四九頁。

⑲ 森武之助氏翻刻解題『十二段草子』大東急記念文庫叢刊別巻、汲古書院、一九七七。以下本文はこれによる。

⑳ 金東旭氏他『春香伝比較研究』ソウル三英社、一九七九。以下本文はこれによる。但、ハングル引用は現代表記に直した。

㉑ 表作成において次の論著を参考にした。金東旭氏『増補春香伝研究』延世大学校出版部、一九七六。注⑩の徳田和夫氏の論稿。氏は十六段本について考察されている。

㉒ 市古貞次氏『中世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一、九九頁。

㉓ 大島建彦氏『御伽草子』日本古典文学全集、小学館、一九七四、二六四頁。

㉔ 注⑩の室木弥太郎氏著書、四三五頁。

㉕ 山口麻太郎氏校訂『百合若説経』一誠社、一九三四、二九頁。

㉖ 今野圓輔氏『馬娘婚姻譚』岩崎美術社、一九八五、一〇二頁。

㉗ 注㉑の金東旭氏著書、第六章参照。

㉘ 白楽天の「長恨歌」には楊貴妃の容姿を「雲鬢花容金歩揺」とし、髪を雲に譬えている。春香の髪の形容が中国でのものをふまえていることがわかる。

㉙ 松本隆信氏によると、芸能とは「詩歌、書画、音楽など、上流階級の人間が教養として身につけていなければならない各種の技芸」である。（『御伽草子集』新潮日本古典集成、一九八〇、一一頁頭注）

㉚ 後述する4での表に挙げたAからDの諸本などをさす。

㉛ 金琪洙氏編『韓国音楽・5』伝統音楽研究会、一九八一。チャヂンモリの長短で歌唱されている。

㉜ この点については金東旭氏の他、李相澤氏、趙東一氏、金興圭氏等の論稿がある。

㉝ 朝鮮朝の儺礼について記した「文宗実録」元年六月壬午条にこの語が見える。金東旭氏「パンソリ発生攷」（『韓国歌謡の研究』、乙酉文化社、一九六一）参照。

㉞ 市古貞次氏他校注『曽我物語』日本古典文学大系、岩波書店、一九六六、一四一頁。

㉟ 市古貞次氏校注『御伽草子集』日本古典文学大系、岩波書店、一九五八。

㊱ 注⑩の荒木氏は「付くもと（橋本か）の乙鶴」「堂の辻の人丸」とされている（同書四五七頁）。

㊲ 『角川日本地名大辞典・静岡県』角川書店、七六〇頁。

㊳『角川日本地名大辞典・神奈川県』角川書店、六二二頁。
㊴ 岡見正雄氏他校訂『神道大系・文学篇一神道集』神道大系編纂会、一九八八、二〇〇頁。
㊵ 古小説『淑香伝』に登場する女性主人公。
㊶ これについては注⑦に詳しい。
㊷ これに関する考察として鳥居フミ子氏「古浄瑠璃の展開と義経像の形成」（『東京女子大学日本文学』四八号）などがある。
㊸ 加美宏教授の御教示による。
㊹ 注㊴二八四頁。
㊺ 注㉙二五八頁頭注。
㊻『定本柳田国男集・第七巻』「物語と語り物」筑摩書房、一九六八、四四頁。
㊼ 佐竹昭広氏『下剋上の文学』筑摩書房、一九六七。
㊽ 注㉟に同じ。